

今村 怜

防衛大学校

要 旨

Shimojo(2005)によれば、後置された要素は情報構造上の重要度が低く、後続談話の中心になりにくいとされる。しかし、収集されたデータは「話し言葉」であり、そうした性質が「書き言葉」にも一般化できるかどうかは定かでない。また、興味深いことに、ヲ格目的語を後置した例は、Shimojoの収集したデータには含まれていなかった。そこで、本研究では、ヲ格目的語を後置したタイプの後置文(S-V-O_{ACC})に絞ってコーパス解析を行った。その結果として、後置要素は前置要素よりも新情報としての性質を強く帯びており、かつ、前置要素と同程度の後続談話における「重要性」を持っているということが示された。したがって、後置要素の「重要性」というのが、書き言葉における後置文特有の機能だという可能性がある。また、後置された目的語の多くは「SV関係を含む命題」であった。この事実は、文処理上の負荷を軽減するために重い要素を後置したという可能性を示唆する。

1. はじめに

日本語は SOV 型の言語とみなされているが、統語的観点からは比較的語順の自由度が高い(藤井 1991, Hinds 1983, Saito 1985, Simon 1989)。それゆえ、終助詞の存在などの制約はあるが、動詞要素の後ろに項要素を配置することができる。このように、(1) のような「述語の後に要素が現れる文を後置文」と呼ぶ(瀬楽 2015: 71)。

- (1) a. メアリーが食べるよ、お菓子を
b. お菓子を食べるよ、メアリーが

(Imamura 2017a: 100)

後置文の研究は、統語面だけでなく、機能的側面からも盛んであるが、これらの先行研究は「話し言葉」を念頭に置いたものが多数派である(藤井 1995, 久野 1978, 高見 1995, Shimojo 1995, 2005)。この点に関しては、後置文が話し言葉と相性がよいという性質を勘案すれば、十分に理解できるものである。実際に、久野(1978:67)は、「文・節の主動詞が、文・節末に現れなければならない」という規則は「書きことばとしての日本語に通用する規則で、話しことばとしての日本語には通用しない」と主張しており、後置文が話し言葉では「何の抵抗もなしに、ひんばんに用いられている」と指摘している。では、書き言葉を後置文の分析対象から外してもよいのであろうか。瀬楽(2015: 72)が指摘しているように「物語談話で典型的に観察される後置文の性質も存在する」のであり、「後置文の包括的理解のためには、物語談話についての考察」も必要であると考えられる。すなわち、書き言葉も分析対象に加えることで、後置文の機能の全体像が見えてくるものと考えられる。そこで、本研究では、書き言葉における後置文の機能をコーパス解析に基づいて探った。その結果として、後置要素は、前置要素と同程度の話題持続を示すとともに前置要素よりも高い新情報性を示した。これは、先行研究で観察されている後置文の特性と相異なる傾向である。

以下では、第2節で、後置文の談話機能に関する先行研究および本研究で採用した分析手法の枠組みを提示する。続いて、第3節で本研究の分析の詳細を述べ、第4節でその結果に対して考察を加える。最後に、第5節で本論のまとめと今後の展望について述べる。

2. 先行研究

2.1. 後置文の談話機能

後置文の機能に関する古典的な研究としては、久野(1978)が挙げられる。久野の提案する後置文の用法に関する機能的制約は(2)のようにまとめられている。これは、後置された要素は補足的情報であり、後置要素なしでも意味が通じる場合にだけ使用できるということである。

- (2) 後置文の伝達機能

後置文において主動詞の後に現れる要素は、(i) 話し手が最初、聞き手にとって、先行する文脈、或いは非言語的文脈から、復元可能であると判断して省略したものを、確認のため、文末で繰り返したもののか、(ii) 補足的インフォメーションを表わすものに限られる

(久野 1978: 68)

たとえば、(3a)の疑問文に対する応答として基本語順文である(3b)は容認可能だが、後置文である(3c)は不適格である。というのも、後置要素である「昭和30年に」は復元可能な情報でもなければ補足的な情報でもないからである。仮に前置要素である「生まれた」だけであつたら、疑問文に対する答えにならない。後置要素が必須であるために後置文として成立しない。

- (3) a. 太郎は、昭和何年に生まれた？
b. 昭和30年に生まれた
c. *生まれた、昭和30年に

(久野 1978:69)

しかし、「省略」と「補足」では説明のつかない後置文が存在する。(4)の後置要素「結婚したいって」は省略されるような情報でもなければ補足情報でもない。前置要素「私言ったの」だけでは、文として成立しないだろう。このような事例を説明するうえで、久野の提案だけでは不十分である。

- (4) 私言ったの、結婚したいって

(高見 1995: 232)

そこで、後置文の機能について、後置された要素が後置されていない要素よりも情報構造上の重要度が低いという提案がなされている(Maynard 1989, Shimojo 1995, 2005, Simon 1989, 高見 1995)。たとえば、Maynard(1989:35)は、2つの要素が共に新情報である場合は、重要でない情報を後方に回すという選択肢を取りうると主張している。それに対し、Simon(1989:189)は、重要情報を最初に述べるという規則の副産物として後置文が生じるという提案をしている。すなわち、重要な情報を先に述べなければならない状況では、相対的に重要度の低い情報を文の後方で述べているというわけである。Maynard(1989)とSimon(1989)の提案はコインの両面の関係にある。というのも、Maynard(1989)が「後置要素の重要度は低い」という点に注意を向けているのに対し、Simon(1989)は「前置要素の重要度は高い」という点に注目しているからである。同様に、高見(1995)は、「最も重要な情報は後置要素にならない」という機能的制約を提案している。たとえば、焦点要素である疑問詞を後置した(5a)は不適格な文である。それに対し、非焦点要素を後置した(5b)の容認度は高い。この違いは、焦点要素は最も重要度の高い情報であると仮定することで説明ができる。

- (5) a. *君は食べたんですか？ 何を
b. もう読みましたよ その本は

(高見 1995: 227-8)

ところが、Hinds(1982)および江口(2000)は、最も重要な情報が後置されるタイプの後置文を観察している。たとえば、(6)の後置要素「おまえがあいつの車の陰で金を渡しているところを」は、焦点要素であり、最も伝えたい情報であるにもかかわらず後置されている。これは、高見(1995:248)の提案する機能的制約に対する明らかな反例である。

- (6) おい、見たぞ、おまえがあいつの車の陰で金を渡しているところを

(江口 2000: 87)

このように、後置文の機能に関しては、後置要素が「最も重要な情報ではない」場合と「最も重要な情報である」場合の両方がある。その点に関して、Nakagawa, Asao, and Nagaya(2008:2)は、前置要素と後置要素の間のポーズの有無によって後置文を分類している。具体的には、ポーズのないタイプの後置文における後置要素は「旧情報」であり、ポーズのある後置文にお

る後置要素は「新情報」であると提案している。たとえば、後置要素の「米」が新情報である (7) では、ポーズのあるタイプの後置文の容認度の方が高い。それに対し、後置要素の「米」が旧情報である (8) では、ポーズのないタイプの後置文の容認度の方が高い。このように、後置要素と情報の新旧はポーズの有無と相関していると考えられる。

- (7) a. あの お寿司屋さん おいしい?
b. おいしいよ 米は (ポーズあり)
c. ??おいしいよ 米は (ポーズなし)
- (8) a. 僕 米 嫌い
b. ?おいしいよ 米は (ポーズあり)
c. おいしいよ 米は (ポーズなし)

(Nakagawa et al. 2008: 7)

その他の研究としては、Shimojo (2005) による量的アプローチが挙げられるだろう。Shimojo は「話し言葉」のデータに基づき、ポーズのないタイプの後置文の情報構造の解析を行った。その結果として、(9) のような機能的制約を提案している。すなわち、後置された要素は情報構造上の重要度が低く、後続文脈に現れにくいという観察を行っている。

- (9) The post-predicative encoding of arguments
The information encoded in post-predicative arguments is unimportant such that the information is defocused in the cataphoric context.

(Shimojo 2005: 224)

Shimojo は、後置された要素がどのような格を持つとも、一貫して後続文脈に出現しにくいという観察を行っている¹。たとえば、(10a) の後置要素「マキ」はガ格でマークされているが、後続文脈の中心として働いていない。通常、主格は後続文脈の中心として引き継がれやすいが、後置された場合は、その傾向に従わないのである。

- (10) a. 言った マキ が
b. ルックスが同じ?

(Shimojo 2005: 211)

Shimojo の研究は示唆に富むものであるが、収集したデータが話し言葉であるという制約がある。また、興味深いことに、大量の実例を分析しているにもかかわらず、ヲ格を後方に回した後置文のデータを含んでいなかった。ここで注目すべきは、(11)に示されるように、ヲ格の後置は、統語的に文法的な操作であるということである。

- (11) ついに当てたぞ 大穴を

(高見 1995: 228)

それにもかかわらず、実例が観測されなかったのはなぜであろうか。また、Shimojo の提案した後置文の用法に関する機能的制約は、書き言葉にも通用するものなのであろうか。本研究では、これら2点を書き言葉の観点から探っていくことを目指す。

2.2. 解析の枠組み

本研究では、Givón (1983,1988) の提唱する「主題持続 (Topic Persistence、以下 TP)」と「指示距離 (Referential Distance、以下 RD)」という概念を用いる。TP は、ある指示対象が現れてから、それに後続する 10 節の中で何回言及されているのかを表す値

¹ Imamura (2017b) は、かき混ぜ文であっても、主語の方が目的語よりも後続文の中心になりやすいという観察を報告している。それゆえ、格の性質とは独立して後置要素の主題持続が定められるというのは興味深い。

である。それにより、間接的にはあるが、特定の指示対象の後続談話における「重要度」を客観的に計測することができる。具体的には、重要な情報であればあるほど TP の値は高くなると考えられる。それに対し、RD は、対象となる名詞句と、その先行詞の距離を計測する。これにより、特定の指示対象の「旧情報性」を段階的に計測することができる。なお、RD の最大射程は 20 節であるので、1 から 20 の値を付与するのが標準的な分析手法である (Hinds 1983, Hinds and Hinds 1979, Imamura 2014, 2015, 2017a,b, Siewierska 1993)。RD は前方照応的な概念なので、TP とは逆に値が大きいほど旧情報性が弱いということになる。TP と RD は「重要性」と「旧情報性」を客観的に測定できるという意味で「量的」なアプローチであり、談話機能を数値化できるという強みがある。また、TP と RD は Shimojo (2005) の解析にも用いられている概念であり、本研究の分析結果との直接比較が可能になるというメリットもある。

3. 分析

3.1. 分析の対象と手順

解析の手順としては、まず、現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) から「ヲ格で終わっている実例(を。)」を抽出した。そのうえで、SVO 型の後置文の構造になっているものを手動で選り分けた。その際に、「後置要素を述語前方に置いても文法的であるタイプ」と「後置要素を述語前方に戻すことができないタイプ」に分類した。後置要素を元の位置に戻せるタイプの後置文は、主語がガ格でマークされたものが 7 例、トピックマーカークのハでマークされたものが 47 例、助詞のモでマークされたものが 6 例、ゼロ格で標示されたものが 2 例、ゼロ代名詞で実現されたものが 53 例観察された。後置要素を元の位置に戻せないタイプの後置文は、総計で 109 例観察された。瀬楽 (2015) の判断基準に従い、「後置要素を述語前方に置いても文法的であるタイプ」のみを分析対象とした。分析の対象外となった実例には、(12a) のように前方要素を言い換えたものや (12b) のように前方要素を繰り返したものが含まれる。

(12) a. 彼女をとくと眺めてみるがよい。優雅なシチリアの民俗衣裳に身を包んだ天国的な美しさを。

b. ヴァリセガ・ドラホマノフは、微笑を洩らした。見るものの心を凍らせるような微笑を。

(BCCWJ)

主語については、(13) のような助詞の「ガ」ないしは「ハ」でマークされた実例のみを分析対象とした。これは先行研究のデータと直接比較をするためである。なお、本論では、主語がガ格でマークされた後置文を「ガ後置文」、ハでマークされた後置文を「ハ後置文」と呼ぶことにする。次に、主語および目的語の RD および TP を計測した。なお、対象となる名詞間の同一指示関係を定めるための基準は、Imamura (2014) に準拠した。最後に、ガ後置文とハ後置文の頻度に対しては χ^2 二乗検定、RD および TP には t 検定を行った。

(13) a. S が V O を [ガ後置文]

b. S は V O だ [ハ後置文]

3.2. 結果の予想

RD に関する予測は以下のとおりである。もし Nakagawa et al. (2008) の分析が正しいとすれば、後置要素は新情報性を帯びていると考えられる。すなわち、目的語の RD は高い値を示すと予想される。というのも、書き言葉における後置文には時間的制約が薄く、ポーズのあるタイプと似た特性を持つと考えられるからである。それに対し、Shimojo (2005) の提案した機能的制約が書き言葉にも当てはまると仮定すると、目的語の RD は比較的低い値を示すかもしれない。次に TP についてだが、もし後置要素が高見 (1995) の提案する機能的制約に従うのであれば、TP は低い値を示すと予想される。一方、もし後置要素が Hinds (1982) の指摘するような「最も重要な情報の後置」が書き言葉の特性であるとするならば、TP の値は高い値を示すと予想される。

3.3. 結果

まず、ガ後置文とハ後置文の頻度の間に有意差があるかどうかを調べるために χ^2 二乗検定をかけた。その結果として、両構文の頻度の間には有意差があることが示された ($\chi^2(1)=29.629, p<.001$)。

表1. 文のタイプごとの実例数

文のタイプ	度数
ガ後置文 (S が VO を)	7
ハ後置文 (S が VO を)	47

ガ後置文に関しては、度数が少なすぎるために統計処理をかけることができなかった。それに対し、ハ後置文の RD に関しては、主語と目的語の間に有意差が観察された($t(92)=1.99, p<.05$)。これは、目的語の RD が主語の RD よりも有意に高い値を示したということを意味する。ところが、ハ後置文の TP に関しては、主語と目的語の間に有意差はなかった($t(92)=1.50, p=.13$)

表2. 各条件の RD および TP の平均値および標準偏差

文のタイプ	文法関係	RD		TP	
		M	SD	M	SD
ガ後置文(S が VO を)	S	5.14	5.27	2.86	2.12
	O	3.71	2.81	3.57	3.05
ハ後置文(S が VO を)	S	4.00	6.09	2.74	2.41
	O	6.96	8.16	3.55	2.80

4. 考察

まず、ガ後置文の頻度はハ後置文よりも有意に低いという結果が示された。これは、久野(1978)の提案する「旧から新へのインフォメーションの流れ」および「談話法規則違反のペナルティー」で説明ができる。両規則は(14)と(15)に示されている。

(14) 旧から新へのインフォメーションの流れ

文中の語順は、古いインフォメーションを表わす要素から、新しいインフォメーションを表わす要素へと進むのを原則とする

(久野 1978: 54)

(15) 談話法規則違反のペナルティー

談話法規則の「意図的」違反に対しては、そのペナルティーとして、不適格性が生じるが、その「非意図的」違反に対しては、ペナルティーがない

(久野 1978: 39)

まず、ガ格は新情報をマークする際に好まれるのに対し、話題標識の「ハ」は旧情報をマークする際に使われる傾向がある(久野 1973)²。ここでは、話をシンプルにするために、「ガ＝新情報」かつ「ハ＝旧情報」とみなす。「ヲ格」については「ガ」と「ハ」の中間程度の旧情報性を帯びていると仮定する(Hinds 1983)。そのように考えると、「S が VO を」のパターンは、新情報が旧情報に先行する新旧語順になる。一方、「S は VO を」のパターンは、旧情報が新情報に先行する旧新語順になる。これを(14)に照らし合わせて考えると、談話法規則に違反しているのは「S が VO を」のパターンである。(15)によれば、有標な構文が談話法規則に違反するとペナルティーが生じる。後置文は特殊構文であるので、有標な構文に相当する。それゆえ、「S が VO を」のパタ

² Hinds (1983) に示されるように、最もトピック性の高い指示対象を表わすのに最適なのはゼロ代名詞である。それゆえ、「ハ」はゼロ代名詞ほどではないが相対的に旧情報性の高い要素をマークするのに使用されるのだと推測される。

ーンは(14)および(15)の観点から望ましくない。逆に「SはVOを」のパターンは(14)にしたがっているため、情報構造的に望ましい。しかし、ハ後置文(SはVOを)が旧新語順とすれば、元の語順(SがOをV)でも同様の情報構造を表すことが可能であり、目的語をわざわざ移動させるモチベーションは低い。それゆえに、後置文自体の頻度が低かったのだとも考えられる。

次に、ハ後置文の後置要素は前置要素よりもRDが高いという結果が観察された。すなわち、後置要素は前置要素よりも新情報性が高かった。これは、Nakagawa et al. (2008) の提案するポーズのあるタイプの後置文と似た情報構造をハ後置文が持っているということを意味する。これは、書き言葉の性質を勘案すると、妥当な結論である。というのも、書き言葉における後置文はオフラインの言語産出活動であり、時間的な制約が緩いという意味ではポーズのあるタイプと産出環境が似ているからだ。

ハ後置文のTPに関しては、後置要素と前置要素の間に有意差は観察されなかった。すなわち、後置要素と前置要素は同程度の「重要度」を示した。先行研究によれば、「ハ」でマークされた要素は主題持続性が高く、後続談話の中心になりやすいという傾向がある(Imamura 2017a,b, Kameyama 1985, Shimojo 2005, Walker, Iida and Cote 1994)。たとえば、(16)の後置要素に含まれる登場人物「寛二」は、後続談話の中心として重要な働きをしている。その点を勘案すると、後置されたヲ格要素も比較的重要度の高い情報であると考えられる。これは先行研究で観察されている傾向と矛盾する結果である。それゆえ、重要度の高い情報を後置するというのは、書き言葉における後置文の特徴であるのかもしれない。

(16) その時の太一はまだ知らなかったのだ。寛二がセリフ覚えの天才であることを。「家を出るって、姉ちゃんみたいに違う所に住むってこと？」太一はメンマを口に放りこみながら頷く。「ドラキュエ置いていくから、使っていいぞ」ドラキュラクエスチョン。寛二のお気に入りのファミコンゲームだ。首をかしげたまま寛二は少し寂しそうな顔をして、それから少し嬉しそうな顔をする。ドラキュエのことを考えているに違いない。かしげた首を戻して寛二が笑った。

(BCCWJ)

さて、書き言葉における後置要素が重要情報を表す傾向があるとして、それはなぜなのだろうか。まず、書き言葉では「緊急性を持った情報を前置する」(Shimojo 2005: 216)という「緊急性の原理」に従う必要がない。というのも、文章を書く際には十分な時間があるので、オンライン上の原理は働かないと考えられるからだ。それゆえ、重要情報を後置することが可能になる。熟慮したうえで作文されている場合には、修辞法としての文体効果をねらって後置されているのかもしれない(瀬楽 2015)

次に、文処理の観点から後置文について再考したい。後置された目的語は、大多数が「SVを含む命題」であった。具体的には、45/47例(95.7%)がSV関係を含む目的語を後置していた。これは、文処理上のコストを引き下げるために重い要素を後置したと仮定することで説明ができる。もし重い要素を後置しなかった場合は、長い目的語の内容を作業記憶に保持しながら動詞要素を待つことになる。それに対し、目的語を後置すると、先にSV関係を完成させることができる。このように考えると、処理負荷を軽減するために後置文を選択するということになる。

5. おわりに

本研究では、後置されたヲ格目的語の解析を通じて、書き言葉における後置文の機能を探った。その結果として、後置要素は前置要素よりも新情報性が高いだけでなく後続談話における重要度も高いという傾向が観察された。これはShimojo (2005) の観察したタイプの後置文とは異なる情報構造である。それゆえ、後続談話における重要度というのは、書き言葉における後置文特有の性質であるのかもしれない。一方、少なくとも見かけ上はガ後置文における後置要素は旧情報性が高いという分析結果が提示された。したがって、後置要素の新情報性というのは、書き言葉における後置文の用法にとって重要な選択基準ではないのかもしれない。むしろ、情報の新旧は助詞の選択に付随する現象であるという可能性がある。次に、書き言葉における後置文の後置要素は「SV関係を含む命題」である確率が非常に高いということが示された。この事実は、文処理上のコストを引き下げるために重い要素を後置しているという可能性を示唆する。最後に今回の分析の欠点についてだが、収集した実例数が少なすぎるという点に問題がある。それゆえ、本研究における結論は暫定的なものであり、研究自体もサンプルスタディとしての域を出ない。また、情報構造は有生性のような概念と相関するため、将来的には複数の要因を考慮したデザインで解析を行う必要がある。これらは今後の研究の課題とする。

謝辞

本研究の一部は、科学研究費補助金(20K13020)の助成を受けて行われた。

参考文献

- 江口 功(2000). 「日本語の後置文」『言語文化研究』12, 81-93.
- 藤井 洋子 (1991). 「日本語における語順の逆転—談話語用論的視点からの分析—」『言語研究』99, 58-81.
- 藤井 洋子 (1995). 「日本語の語順の逆転について—会話の中の情報の流れを中心に—」高見健一(編)『日英語の右方移動構文』, 167-198. 東京: ひつじ書房
- Givón, T. (1983). Topic continuity in discourse: An introduction. In T. Givón (ed.), *Topic Continuity in Discourse*, 5-41. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Givón, T. (1988). The pragmatics of word-order: Predictability, importance and attention. In M. Hammond, E. Moravcsik & J. Wirth (eds.), *Studies in syntactic typology*, 243-284. Amsterdam: John Benjamins Publishing.
- Hinds, J. (1982). *Ellipsis in Japanese discourse*. Alberta, Canada: Linguistic Research, Inc.
- Hinds, J. (1983). Topic continuity in Japanese. In T. Givón. (ed.), *Topic continuity in discourse: A crosslinguistic quantitative study*, 43-93. Amsterdam: John Benjamins Publishing
- Hinds, J. & Hinds, W. (1979). Participant identification in Japanese narrative discourse. In G. Bedell, E. Kobayashi & M. Muraki (eds.), *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*, 201-12. Tokyo: Kenkyusha.
- Imamura, S. (2014). The Influence of givenness and heaviness on OSV in Japanese. In W. Aroonmanakun, P. Boonkwan & T. Supnithi (eds.), *Proceedings of the 28th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computation*, 224-233. Bangkok: Chulalongkon University.
- Imamura, S. (2015). The effects of givenness and heaviness on VP-internal scrambling and VP-external scrambling in Japanese. *Studies in Pragmatics*, 17, 1-16.
- Imamura, S. (2017a). *Information structure in Japanese: scrambling, topicalization and passives*. Doctoral dissertation, University of Oxford.
- Imamura, S. (2017b). A pragmatic account of scrambling and topicalization in Japanese. *Lingua*, 191, 65-80.
- Kameyama, M. (1985). *Zero anaphora: the case of Japanese*. Doctoral dissertation, Stanford University.
- 久野 暲 (1973) 『日本文法研究』 東京: 大修館書店.
- 久野 暲 (1978) 『談話の文法』 東京: 大修館書店.
- Maynard, S. K. (1989). *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management*. Norwood, NJ: Ablex.
- Nakagawa, N., Asao, Y. & Nagaya, N. (2008). Information structure and intonation of right dislocation sentences in Japanese. *Kyoto University Linguistic Research*, 27, 1-22.
- Saito, M. (1985). *Some Asymmetries in Japanese and their Theoretical Implications*. Doctoral dissertation, MIT.
- 瀬楽 亨 (2015). 「日本語の後置文: 物語談話からの視座」『日本語文学』70, 71-96.
- Shimojo, M. (1995). *Focus structure and morphosyntax in Japanese WA and GA, and word order flexibility*. Doctoral dissertation, State University of New York at Buffalo.
- Shimojo, M. (2005). *Argument encoding in Japanese conversation*. Hampshire and New York: Palgrave Macmillan.
- Siewierska, A. (1993). Syntactic weight vs. information structure and word order variation in Polish. *Journal of Linguistics*, 29, 233-265.
- Simon, M. E. (1989). *An analysis of the postposing construction in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Michigan.
- 高見 健一 (1995). 『機能的構文論による日英比較』 東京: くろしお出版.
- Walker, M., Iida, M. & Cote, S. (1994). Japanese discourse and the process of centering. *Computational linguistics*, 20, 193-232.